SHOW-HEY シネマルーム

★★★★

ヤンヤン　夏の想い出　4K レストア版
(YI YI)

2000 年／台湾・日本映画
配給：ポニーキャニオン／173 分

2025（令和 7）年 12 月 29 日鑑賞　テアトル梅田

Data　2025−127

監督・脚本：楊徳昌（エドワード・ヤン）
出演：呉念真（ウー・ニエンチェン）／イッセー尾形／金燕玲（エイレン・チン）／張洋洋（ジョナサン・チャン）／李凱莉（ケリー・リー）／チェン・シーシェン／スザンヌ・シャオ／林孟瑾（リン・モンジン）／コー・スーユン／チャン・ユーパン

みどころ

中国に張芸謀（チャン・イーモウ）、陳凱歌（チェン・カイコー）あれば、台湾には侯孝賢（ホウ・シャオシェン）、楊徳昌（エドワード・ヤン）あり！また、ホウ・シャオシェン監督の代表作が『非城情市』（89 年）なら、エドワード・ヤン監督の代表作は『牯嶺街少年殺人事件』（91 年）。

そんなエドワード・ヤン監督の 25 年前の遺作が 4K レストア版で復活したが、本作は、『ウエストサイド物語』（61 年）にも似た雰囲気のする「青春モノ」だった『牯嶺街少年殺人事件』とは全く異質の、「家族モノ」。とは言っても、日本の巨匠・山田洋次監督のような単純でわかりやすい「家族モノ」ではなく、90 年代の台北を舞台にした多くの登場人物による複雑なストーリーだから、それぞれのキャラの人生模様をしっかり見定めたい。

その上で、祖母の葬儀の席に臨んだ 8 歳のヤンヤンが、自らノートに書き付けた思いを朗読するラストの静かなハイライトシーンに、心から納得！

——＊——＊——＊——＊——＊——＊——＊——＊——＊——

■□■台湾の巨匠の遺作が 25 年の時を経て 4K 版で大公開！■□■

中国に張芸謀（チャン・イーモウ）、陳凱歌（チェン・カイコー）あれば、台湾には侯孝賢（ホウ・シャオシェン）、楊徳昌（エドワード・ヤン）あり！今は 2025 年 12 月末。21 世紀に入ってから早や四半世紀が過ぎたわけだが、20 世紀末の 1980 年代、90 年代の中国と台湾には上記のような巨匠がいた。また、ホウ・シャオシェン監督の代表作が『非城情市』（89 年）（『シネマ 17』350 頁）なら、エドワード・ヤン監督の代表作は『牯嶺街少年殺人事件』（91 年）（『シネマ 40』58 頁、『シネマ 44』184 頁）。『牯嶺街少年殺人事件』は壮大な「歴史モノ」だった『非城情市』とは全く異質で、どこか『ウエストサイド物語』（61 年）にも似た雰囲気のする「青春モノ」だった。

そんな“台湾ニューウェーブ”と呼ばれたエドワード・ヤン監督の『牯嶺街少年殺人事件』も『カップルズ』(96 年)(『シネマ 58』58 頁)も私が鑑賞したのはリアルタイムではなく、すべて 20～30 年後の 4K レストラン版によるものだ。しかして、2025 年 4／22 に観た『カップルズ』に続いて、2025 年の今、25 年前の同監督の遺作たる本作が 4K レストラン版として公開されたから、こりゃ必見！

■□■90 年代の台湾の経済は？市民生活は？日本との関係は？■□■

2025 年の大晦日直前の 12／30 の朝刊には、中国軍による大規模な台湾包囲演習の実施が報道された。その規模や熱の入れ方を見れば、2027 年までの「中国夢」の実行と達成はますます本気モード！？2022 年 2 月に始まったウクライナ戦争が 4 年も経過しようとしている 2025 年末の今、台湾と中国との緊張関係はここまで強まっている。しかし、1990 年代の台湾は政治的には民主主義のシステムが安定し、経済的にはコンピューターを中心とする日本との経済交流も順調だったから、2025 年の今よりはずっとマシ・・・？

それはともかく、エドワード・ヤン監督は重厚な歴史青春群像劇だった『牯嶺街少年殺人事件』から一転して、本作では安定した政治の下で、順調な経済成長を続けている 1990 年代の台湾を舞台に、重厚な人間ドラマを！

■□■主人公一家のキャラは？その他の登場人物のキャラは？■□■

本作の舞台は台北。小学生のヤンヤン（張洋洋／ジョナサン・チャン）はコンピューター会社を経営する父 NJ（呉念真／ウー・ニエンチェン）、母ミンミン（金燕玲／エイレン・チン）、高校生の姉ティンティン（李凱莉／ケリー・リー）、そして祖母と共に台北の高級マンションで幸せを絵に描いたような暮らしをしていた。ところが、母の弟アディ（チェン・シーシェン）と恋人シャオイェン（スザンヌ・シャオ）との結婚式を契機に、一気に一家の歯車が狂い始めることに・・・。

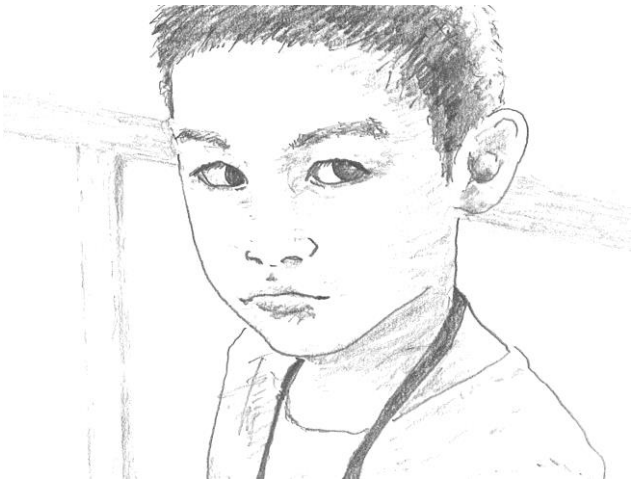
私は、「ヤンヤンの夏休み」というタイトルからして、本作は、侯孝賢監督初期の作品である『冬冬の夏休み』(84 年)(『シネマ 38』229 頁、『シネマ 44』198 頁)と同じような“心温まる小作品”とばかり思っていた。ところが、なんと本作は、173 分の大作だったからビックリ！登場人物もメインとなるヤンヤン一家の 5 人以外に、①いろいろと問題を起こすマンションの隣人夫婦やその娘のリーリー（林孟瑾／リン・モンジン）、②リーリーのボーイフレンド・ファティ（チャン・ユーパン）、③NJ の初恋の女性シェリー（コー・スーユン）、④NJ の会社の同僚たち、さらには⑤天才的なゲームデザイナーである日本人の太田（イッセー尾形）等が登場する。またストーリーとしても、①ヤンヤン一家や新婚ホヤホヤのアディ夫婦、そして隣人夫婦の家族・夫婦問題、②ティンティンやリーリーのボーイフレンドをめぐる恋愛問題、③NJ の会社の再建問題、④新興宗教にハマった母親をはじめとするヤンヤン一家の家族問題、等々が入れ替わり立ち替わり登場してくるので、それに注目！

家族（のあり方）を描く監督といえば、日本では山田洋次監督がトップだが、山田洋次

監督作品が極めてシンプルであるのに対し、本作は極めて複雑だから、『ヤンヤン　夏の想い出』という素朴なタイトルに騙されることなく、しっかり複雑なストーリーを追いかけていく必要がある。その上、重要な役として日本人の太田が登場し、NJ の会社の経営機危機を巡っては、東京出張であっと驚く事件（？）も展開するので、それらの複雑な物語もしっかりと！

■□■ヤンヤンにも気になる女の子が！カメラにも注目！■□■

本作後半にみる、ニューヨーク出張に出かけた NJ と初恋の女性シェリーとの関係は、シェリーが既婚者になっているだけにヨリを戻すのは困難と思われたが、意外にも・・・？それに対して、アディ×シャオシェンの新婚夫婦は幸せいっぱいの生活かと思いきや、さまざまなハプニングが！さらに 10 代の高校生の恋模様は、チェロを弾くリーリーとピアノを弾くティンティンが、一人の男・ファティをめぐって恋のさやあて（？）をしていく姿が興味深い。かつて、三田明は『美しい十代』（63 年）を、舟木一夫は『高校 3 年生』（63 年）や『学園広場』（63 年）を歌って、高校時代の青春や恋模様の素晴らしさを歌い上げたが、さて本作に見る女子高生たちの恋模様の展開は？



他方、まだ 8 歳のヤンヤンには恋はほど遠いはずだが、それでも気になる女の子がいるらしく、エドワード・ヤン監督はそれを丹念に追っていくので、そのストーリーにも注目！日本では、かつて樹木希林と岸本加世子が出演した「フジカラーで映そう」のコマーシャルが大ヒットしたが、デジカメ時代に移行し、さらにスマホ撮影に移行した今では、フィルム写真は貴重な思い出だ。しかるところ、本作ではヤンヤンがなぜか小型のフィルムカメラに凝り、あるターゲットを懸命に撮影するので、それにも注目！

そんなこんなのさまざまな物語が展開した後、本作ラストは祖母の葬儀のシークエンスとなる。そして、その席でヤンヤンが祖母の遺影に向かって自らノートに書き付けた思いを朗読するシーンが本作のハイライトになるので、その静かで見事なラストに注目！

2026（令和 8）年 1 月 5 日記